

|         |                              |
|---------|------------------------------|
| 氏名      | 本 城 康 臣                      |
| 授与した学位  | 博 士                          |
| 専攻分野の名称 | 医 学                          |
| 学位授与番号  | 博乙第2943号                     |
| 学位授与の日付 | 平成7年12月31日                   |
| 学位授与の要件 | 博士の学位論文提出者<br>(学位規則第4条第2項該当) |
| 学位論文題目  | 頸髄症の術後シネMRI                  |
| 論文審査委員  | 教授 平木 祥夫 教授 清水 信義 教授 折田 薫三   |

### 学 位 論 文 内 容 の 要 旨

シネMRIを用いた頸髄症の動的画像診断法から5つのタイプに分類し、75例の術後評価を行い、臨床成績等について比較検討した。

頸椎症性脊髄症の術後成績ではanterior type が良く、anteroposterior typeが悪かった。一方、頸椎後縦靭帯骨化症ではPosterior typeが良くanterior typeが悪かった。

また、術後MRIで前方からの脊髄への圧迫が軽度残存していても、前方くも膜下腔の脳脊髄液の流れを余り阻害しておらず、術後成績も悪くなかった。術後MRIにおける脊椎前後径と術後成績との関係は脊椎症性脊髄症のanteroposterior typeで強い正の相関を認めたこのタイプにおいては、術後脊髄前後径が復元しない、いわゆる脊髄萎縮を認める例の術後成績が不良であった。

本法は脊髄への圧迫を脳脊髄液の流れで動的に評価できる非侵襲的な検査であるので、術後の除圧効果の評価法として有用であると考えられた。

### 論 文 審 査 結 果 の 要 旨

本研究は脳脊髄液の拍動流を画像化したシネMRIを用いて、頸髄症75例の脳脊髄液流無信号領域を5つのタイプに分類し、術後評価を行い、その成績との関連を比較検討した臨床的研究である。本法が術後の除圧効果の評価法として有用であることを明らかにした価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は博士（医学）の学位を得る資格があると認める。